

水牛通信

VOL.4 NO.2
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

水牛ミュージックコンサート⑤バンコクの大正琴

2

タイの歌楽譜

3

人と水牛 雨をまつイネ 白いハト 黄色い鳥

村からのノート コメのうた ジット・プミサク

カラワン回想録① ウイラサク・スントンシー

12

林光の歌楽譜

24

新しい歌

水牛楽団のページ

25

土呂久びとの笑いについて

対馬幸枝

26

ポーランドの歌楽譜

29

ポーランド式料理のつくりかた 娘にあたえる歌
ヤネク・ヴィシニェフスキは死んだ

黄色い鳥

Handwritten musical notation for the first part of the song. The lyrics are: まさしくおのほなれり さいさいとり (ま) (さ) (い) (に) (の) (ほ) (な) (れ) (り) (さい) (さい) (とり)

[4/4]
おぼえていいるかい 10月14日と15日に流された血を? さめのさうがい

たちは銃弾と催涙ガスのあらいになぞらおされた。武器もたす自由を

もとめてこしたした手はむごんに打ちくぶかれた。立ちどまれ。あの人

たちの魂をとむらおう。正義のためにたたかいつかけるものたすを

はげますために。

Handwritten musical notation for the second part of the song. The lyrics are: とかくとむゆけ ゆめをいだてて (と) (か) (く) (と) (む) (ゆ) (け) (ゆ) (め) (を) (い) (だ) (て) (て)

ふるさとから ひそりわかれ

て (humming)

またからほなれ (ま) (た) (か) (ら) (ほ) (な) (れ)

ほまう 自由なたましい (ほ) (ま) (う) (じ) (ゆ) (う) (な) (た) (ま) (い) (しい)

のちのほてに (の) (ち) (の) (ほ) (て) (に)

コナのうた

あしにさるたび おもい おこせ 水のあせがきか
だれでせしる あしのうま さそ のあけにはにが
やしなう
いさし
くつしい日 ぬこあつあまでま たさ
あせはくろしみのしすく 船はたからだかせ
さらばえて あせあかく 船はつき
す 水のあまの は魚のあせ

村からのノート

ああ あれなすのむらほふ いむら すみなれを
ああ ひろいせが いも字も しらあいはらさき
くさし だれにもまがねいさすまろのあくまぐ
つづいた もりまひさかぜの目さあめも目ざし
やくあみあつこむこにたえて ああ わあものは
まよはず 町のあくまに血をすわれ
に 17 としより子どもが死んだむらにのこせれる水
牛もいない田にすなごももない まちへのいか
りのこえめたこれぬあいはねてもさめてもつづくこのむらで

「カラワーン」回想録 その一

ワイラサク・スントンシー

莊司和子訳

「人と水牛(コン・ガップ・クワイイ)」の歌を私が初めて聞いたのは、ナライホテルで新聞記者ワイラプワット・ウォンポアパンの結婚式が行われた時だった。その時カラワーンの名はまだ、スワット・シーチュアの友人グループの作った本のタイトルにすぎなかった。披露宴会場の小さな舞台の中央にスラチャイ・ジャンティマトン(注1)がすわってギターを弾き、そのわきにはウイサー・カンタップ(注2)とソムキット・シンソン(注3)が立っていた。「……人と水牛、その意味は深い、深くそして長いつきあい、長くあまりにも長くつとめあげてきて、心には安らぎが……」この歌は披露宴とそこに集まった招待客のはなやいだ雰囲気に挑戦するかに響いた。もの静かに過ぎたグラドウン山から戻ったばかりの私にとっ

ても同様だった。スラチャイが私に話してくれたところによると、彼はソムキットと歌の練習をしていたということだ。彼は「バンコク・ポスト」の記者をしている友人から古いギターをもらった。ソムキットは古いヴァイオリンを持っていて、ポップ・テイランの「Master of War」を好んで弾いていた。うたう時はいつもソムキットがヴァイオリンでメロディを弾いた。「人と水牛」の歌はこのようにしてこの二人から生まれたのである。私が彼らの仲間に加わったのは、「プー・カーウ」(注4)「水牛楽団の「ゴメのうた」という詩を彼らが作曲した後のことである。

サンヤー・タマサク政権の時代は、民主主義という言葉のカーテンが今一度開かれた時である。タマサート大学では展示会や政治討論

会が活発に開かれた。NSCTやいろいろな民主化グループは民主主義の宣伝を開始し、進歩的な出版物が市でもたつように売りさばかれた。文学界では「芸術のための芸術」と「生きるための芸術」が最も激しい論争を戦わせていた。一〇・一四の前まではこのような表現は、大学の前の屋台で一冊一冊と並べて売っている本や、進歩派の学生が作っている雑誌や簡易印刷物の類にのみ登場していたにすぎなかったのだが、スラチャイと私が「人と水牛」と「ゴメのうた」をひっさげ、「生きるための歌」を標榜すると(当初私たちのバンドを「トー・セーン・レ・サンジョーン(T. SEN and SANJORN)」と呼んでいた)、これがこの種の歌と楽団を総称するようになったのである。私たちの最初の演奏は

タマサート大学での「生きるための歌の祭典」である。いっしょに出場した他のバンドは主にフォークバンドで、比較的進歩的な歌詞の歌をうたった。パンセン教員養成大学のトーンやタマサートのニットやジがいたことを覚えていた。彼らのグループは主にクロスビー、スチール、ナッシュ・アンド・ヤングの曲を演り、一方いちばんまともでないかっこうをした私たちが「人と水牛」と「ゴメのうた」をうたった。私たちは初めて舞台上立った時からライトを嫌い、それでロウソクをつけた。チュラロンコン大学で初めて演奏した時にはポップ・テイランの「Knokin' to the Heaven Door」をうたつたバンド開きとした。なぜならその頃私たちの手持ちの曲は二、三曲しかなかったからである。南タイからウイナイ・ウツガリクが、一〇・一四革命に感動して作った歌「黄色い鳥(ノック・シー・ルアン)」を持って帰るや、私たちはこの歌を完成させ、ちょうど同じころスラチャイは「金色の光(サーン・セーン・トーン)」を作っていた。ラームカムヘン大学の学部長サク・パースクニラン博士追放の抗議行動を起こした時には、ラームカムヘン大学でこの二曲をうたった。私たちが「トー・セーン・レ・サンジョーン」

が初めて地方公演に行ったところは、ヤソーン県グットチュム郡で、当時まだ学生で新聞社で働いていたウドン・トンノイとブラヨーン・ムンサーンの紹介だった。このころウイナイ・ウツガリクは私たちにいつも同行した。同行した民主主義宣伝隊の学生たちは、ウイサー・カンタップ、ソムボン・サラガウイ、ピニット・ジャルソムバット等である。私たちは砂利トラックに乗って行ったので、一晩中雨にうたれたのだった。昼間は草原での屋外討論会の合間に演奏し、夜はモラーム(東北地方の歌謡)の舞台で農民たちの演しもの合間に演奏した。その翌日は県庁前で乗合トラック(注5)の屋根の上で政治演説と演奏をやった。私たちのバンドは当初政治討論集会の余興的存在にすぎなかった。たとえばチェンマイ大学の大学祭には作家、政治家、学生運動指導者たとえば、ヨートン・タブテイウマイ、ティラユット・ブンミー、セクサン・ブラストグン、アヌット・アーバーピロム、ノツパボン・スワンナバーニット、プリアイ・ブンスー、タンヤー・チュンチャダータン等が招かれたが、私たちのバンドも呼ばれたのである。当時の政治討論会は大変議論がふつとつたもので、私たちははたいていそれが終

つてから演奏した。初日は人文科学部の学生でチェンマイ大学演劇部の優秀な役者でもあったソムボン・ジュンラサップが司会者を努めた。彼は講堂内で起こった険悪な事態の解消にも努めた。極右派の学生たちがポスターを破いて火をつけ、一悶着起こそうとしたのである。その翌日彼らは一〇〇人からの一団となってやって来て、騒ぎはますます大きくなりそうだったが、同じ人文科学部の先輩、ニシット・ジラソーンが事態の收拾にあたってくれた。帰って来る前に私たちは、チェンマイ大学ジャーナリズム学科の放送室で録音をとった。チュラロンコン大学での録音とインタビューはモムルアン(注6)・バンテワノツプテクンが用意したもので、私たちの演奏とスラチャイのインタビューがあった。その後の演奏で忘れることができないのが、一九七四年のメーデー集会の時のことである。万を数える労働者が集まって賃上げを要求したのだが、私たちにとても王宮前広場のど真中で演奏するのはこれが初めてだった。私たちの労働に対する代価は何もなくても、少しも惜しいとは思わなかった。ちょうどその頃コーラートでは、東北職業短大の学生が「バングラデシユ会」というグ

グループを結成して、活動的グループを連合せ、進歩的な歌をうたっていた。彼らは私たちの歌を編曲して、コーラートの農村地帯を演奏して回っていたのである。このグループの指導的メンバーにモンコン・ウトックとトングラーン・タナーがいたのだが、私たちは彼らをタマサート大学で演奏してくれるようさそった。その日「バングラデシユ会」がうたった曲は一曲だけで、「グララ」だった。(これは私たちがヤソートン県から帰る途中通ったグララ草原でストラチャイが作った歌である)。この時モンコンはイサーン(東北)のピン(注7)を持って来ていた。ストラチャイは以前、グララを弾くピンの音はたこに張った糸の音のようだと言っていた。彼らが持参した楽器は、ピンとハーモニカだけで、ギターはといえばその時客席の前列から借りて来たものだったのである。この日私たちは「雨を待つイネ(カーウ・コイ・フォン)」と「やめてくれ(ユット・ゴーン)」をうたった。二曲ともストラチャイの作詞である。この演奏会の後、モンコンとトングラーンが私たちの仲間に加わった。私たちがバンドの名称を「ト・セーン・レ・サムジョン」から「カラワン」に変えたのはこの時からである。カラワンとは終りのな

い旅を意味している。新しい楽団を結成して間もなく、友人の紹介でコンケンのテレビ局5チャンネルに出演することが決まった。楽団を結成したばかりの頃私たちは、自分の楽器というものがほとんどなかった。持ち主がついにあきらめてしまったストラチャイのギター、農民からももらったモンコンのピン、やはり借り物の古いハーモニカが一つ、トングラーンが借りて来たクルイ(注8)、そして私は二人の知人から一つずつギターを借りてきたのである。私たちは東北職業短大の芸術学科の教室で半日ほど練習し、講堂での演奏会に臨んだ。

それに続いて、友人がプリラム県での音楽祭を開催したのにも招かれた。この時はストリング・コンボのバンドが三つ出演していたが、そのうちの二つは「ザ・フォーカス」と「ザ・ファンタステック」で、当時イサーンではかなり有名なバンドだった。この日の舞台はかんかん照りの只中にしつらえられていたので、聴きに来た若者たちは広場の周囲の木陰に三々五々かたまつてすわっていた。私たちは三番目の出場だったが、司会者が「カラワン」とアナウンスしてから私たちが古ばけたギターをかかえて、ボロシャツで登場す

ると、よくも腕を競う気になったと言わんばかりに、クスクスと笑い声があがった。私たちはできたての楽団だったのである。一曲目に「黄色い鳥」をうたい初めると、広場の端に三々五々かたまつていた聴衆はだんだん集まって来て広場をほぼうめ尽してしまつたのだ。プリラムでの演奏が終わると、私たちはただちにコンケンに向い、放映の始まるやうと一時間前にたどり着いた感じだった。録画室に入っていくとディレクターが、「君たち、これで着替えてきたのかね」ときくので、はいそうです、と答えると、居あわせた人たちは一様に理解できない、という風だった。こうしてテレビに出たことで「カラワン」の名前は、イサーンでは多少とも知られる存在となり、この後ただちに私たちはコンケン大学でも出演することになった。

私たちが「カラワン」として初めてバンコク入りした時、最初にぶつかなければならなかったのは金の問題だった。私たちはプロの楽団ではなく、主に展示会、大学祭のような大学での行事の時に演奏してきたからである。何もない時は演奏もなかった。収入は全く支出のみであった。それで私たちは身なりにかまわなかつたわけである。ある時はモンコ

ンとトングラーンは、建物の入口の階段で寝て水道の水を飲んで過ごし、一方私とストラチャイは仕事をさがしてほつき歩いていたりもした。こうして二カ月足らずで私たちは再びイサーンへ引き返さねばならなくなった。カムシン・シーノク(注9)のパークチョン農場を再び稽古場として、なんとか生きのびることができたのである。米と塩を買って持ちこみ、沼の魚を釣って食べればそれで十分だった。ほとんどの時間を私たちは練習に費した。けれども実際そこにいたのは一カ月弱で、コーラート職業学校生が資金集めのためガラシン県で開いた催しに参加した。この時は昼間だったせい、人があまり集まらなかった。それに続いて、ロイエト県ブノムプライ郡では昼間市場で演奏をした。夜私たちは出かけて行って農民楽士たちと話しあった。彼らはいたい地方の土着音楽を奏する人たちで、楽器はピンとケン(注10)の二種類を使っていた。私たちはこの人たちからいろいろ学んだ上、ピン作りの名人を紹介されて、彼にもう一つピンを作ってもらえたのである。そこから今度はマハーサラカムに向ったが、着いたのが夕方過ぎだったので、楽器を用意してもらえず残念ながら演奏できなかつた。自分たち

の楽器さえ持っていればこんな問題は起こらなかつたはずだが。けれどもコンケンに着いてから問題は解消した。そこでまた演奏したのだが、今度はがらりと雰囲気が変わって、コンケン一のコーサ・ホテルで演つたのである。プリラム教員養成短大でもいつも問題なく演奏できた。そのナイトクラブ所属のバンド「ファンタステック」がいつも楽器を提供してくれただけである。一度だけ彼らはそのナイトクラブに私たちを呼んで演奏させてくれた。帰路私たちはコンケンとコーラートの間にあるトングラーンの故郷の村に立ち寄ることになった。楽器をむき出しのままかついで村に入っていくと、「学生さんが来ただよ、学生さんが来配りに来ただよ」とどなっている村人の声を耳にした。ここで異様にうつつたのは、若い男や娘の姿をまるでみかけないこととで、いるのは老人と子供ばかりだった。ただ一人残っていた若者は教師で、「若い者はみんな町へ働きに行つて」と話してくれた。この村はもう長く早づつが続けているのだ。私たちはそれで子供たちの前で演奏した。子供たちはどちらかというソソボン

の滑稽な芝居にうち興じていたようだったが、ストラチャイはここで見たことを詩に書いて「村

からのノート(マイイヘート・ジャーク・ムパーン)」という歌にした。パークチョン農場に帰つた私たちがこの歌を練習していたちようどその頃、ストラチャイは友人が語ってくれた事実と、セーニー・モンコンの家で聴いた「ジョン・パーレーコーン」というタイトルのパラードに感動して、「ジット・プミサク」という歌を作つたのである。

バンコクに戻つて来るとカラワンは再びテレビに出演する機会を得た。3チャンネルで、NSCTが企画した一〇・一四一周年記念プログラムだった。この番組は全国向けだったので、「カラワン」の名を大部有名にしてくれた。ところが私たちの楽団には涉外を担当するマネジメントの体制がなかつたばかりか、もう一つの問題は自分たちの楽器がなかつたのである。アンプもマイクもなかつた。時には賃貸しなければならなかつた。「プラチャーテイパタイ」の記者セーニー・モンコンがマネージャーとして参加し、新勢力党での演奏の話をとってきたのはこのころのことである。それで私たちは一五〇〇パットの出演料を得た。新勢力党で私たちがうたえたのは二、三曲にすぎなかつた。「やめてくれ」をうたい始めると彼らがもうけつこうだと制したから

である。セーニー・モンコンのもう一つの事は、小さな黒い表紙の歌集を出したことで、どこで演奏する時も持って行って六バーツで売ることができた。それといっしょに、ストラチャイがデザインしたマンガによる「カラワンのポスターも売ったのである。私たちはセーニーの家で練習したりレコードを聴いたりしたものだ。彼はある一つの物語を語って聞かせてくれたが、それが後にストラチャイによって「うさぎとかめ」と「光の鳥」という歌になる。

初めて南タイへ巡業に出たのは、セーニーがハトヤイへ取材に出かけることになり私たちをさそったからである。最初金がなくて行かないかと思っていたのだが、ちょうどタマサート大学でバス代値上げ反対の抗議集会があり、私たちもそこで歌をうたい、歌集が一〇〇冊以上売れたのでなんとか行ききの交通費がまかなえることになった。終点ハトヤイには到着して、ソングラー大学を宿泊所にし、その学生からギターを借りた。演奏会は夜大学の食堂で開かれたが、PA設備もまあまあで雰囲気は抜群だったので大変気持よく演奏できた。ハトヤイからバスに乗って次はナラティワートに向った。ここではちよつとした

その祭展で演奏できることになった。そしてこれが第一回目の南タイ巡業の最後の演奏になった。その夜の公演を終えると私たちは、農業短大の前で手をあげて車の止まるのを待った。トラックが一台私たちに同情してプラチュアプキリカンまで乗せて行ってくれたのだ。

私たちがバンコクに戻ったのは、農民の大デモ行進が終了した後だった。私たちの新しい企画は「人と水牛」「コメのうた」「黄色い鳥」「ジット・プミサク」を入れた小さいレコードを吹き込むことだった（以前「ガンマチョン」楽団がこれらの歌を吹き込んだことがある）。吹き込みの一月足らず前にお金が入ったのでギターを三台買い、ポインター・グラドンチャムナンは「黄色い鳥」でクルイを吹いてくれた。初めてのレコードは五〇〇枚出し一枚が二五バーツで売られたのである。こうして私たちの生活は多少ましになってきた。残念なのは最初のレコードは市場を通さなかったで、十分に広い範囲には行きわたらなかつたことである。私たちが初めて労働者のストライキ集会で演奏したのは、ドウシタニホテル闘争の時、ほとんど同じ頃スタンダード・ガリメント工場で警官隊と労働者が衝突

騒ぎがあった。うたい始めて間もなく、完全武装して軍服にそっくりな緑色の制服に身をつつんだ屈強な男たちが十人余り、会場を威圧するようにのりこんで来たのだ。私たちはそれを見て「やめてくれ」をうたい始めた。

「……やめてくれ、兵隊さん、やめてくれ、警官さん、敵の歌をうたうのは、ここへ来て深い泉から冷たい水を飲む。そしていっしょに考えよう……」緑の制服の連中は逃げて行ってしまった。パツタニーでは昼間演奏した。ここでもハトヤイの時と同様、演奏のための準備は整っていたし、学生たちがたくさん応援に集まってくれたので、順調にはこんだ。

ヤラーではヤラー教員養成短大で昼間の演奏だったため、学生たちは授業があり、聴衆は少なかつた。そこから再びハトヤイのソングラー大学に戻ったが、「カラワン」の歌のファンたちがもう一度やってほしいということと再度演奏会を開くことになった。その日ハトヤイのテレビ、10チャンネルの人が聴きにきていて、私たちにテレビの出演を要請した。夜遅くの特別番組で生放送だった。この時のストラチャイの挨拶は次のようなものだった。

「僕たちは「カラワン」です。遠い所からやって来た使者です。斧の刃のある所から柄の

する前に、行ったことがある。けれども私たちの歌は、これらの情況やその場の雰囲気にあまり合っていないという印象を受けたといえる。

私たち「カラワン」は入賞して楯をもらったことがある。ラームカムヘン大学の交通安全協会が、チュラロンコン大学で催したチャリティコンサートで、フォーク・グループと喉を競ったのだ。一九七四年の入賞グループにはトングラーンと同じく左ききのギター弾きがいた。彼らも楯をもらった。彼らにとっでは入賞楯は価値あるものだったかもしれないが、私たちのように腹をすかせている者にとっでは楯は何の交換価値もないものにすぎなかつた。結局その使い途は、一枚の灰皿と なったにすぎなかつた。

中部タイで、カラワンが初めて演奏に行つたところはナコンサワンである。映画館での公演でフォークとフォークの間に出演した。そこでの人気は上々だった。それに続いてチエンマイへ行きチエンマイ大学で一回演奏会を開いたが、北タイでの巡業はそれで頓挫せざるをえないことになった。

ニシット・ジラソーパーンが暗殺された時、私とモンコンはイサーンへ行っていた。演奏

所(注11)へ、歌によってみなさんとお話するためにやって来ました……」

この番組は急ぎよ決まったものだったのでスポンサーがつかなかつたにもかかわらず、私たちは八〇〇バーツの出演料をもらった。そこから私たちはトラン県のうちそうと暗い山岳地帯を通つて、親友ウイナイのいるグラビーに向かった。グラビーではマイクとスピーカーを用意できなかったので、演奏をあきらめウイナイの家があるランター島へ遊びに行くことになる。ちょうど島の祭の日に行き合わせたので、夕方私たちは舟を漕いで村をたずねた。祭の仕度といつても簡素なもので、明りはランプだった。島の女が一人土地の言葉(南タイ語ではなく)で歌をうたった。中年にしては高い声で、バイオリン弾きが一人伴奏した。トングラーンはこのバイオリン弾きに少なからず感銘を受け、そのテクニクを後に「危険なアメリカ人」の歌にとり入れている。それから私たちは歌による交歓会をやった。双方とも言葉は通じないのだが、瞳と瞳でほほえみを交わし、友情を伝え合つたのだ。そこから私たちはトランに引き返したが、ちょうど県の恒例の行事がある日だったので、農業短大の学生のとりはからいで

のためではなく、地方の音楽を聴いて回るためだった。帰路モンコンの郷里ブノムプライに寄つて、地方音楽の演奏家何人かと知り合つた。彼らの主な楽器はピンとケーンである。ここでモンコンはピンをもう一つ入手した。パユーンの木で作つたもので、特別にあつらえない限り手に入りにくいものである。とても澄んだ音を出した。

再びバンコクへ戻つたところで、友人から価値ある贈物をもらった。ウイサー・カンタップが「山の人(コン・プーカウ)」を書いてくれたのだ。ストラチャイはそれに、Neil Kellyという映画の中でミック・ジャガーが演奏していた曲のメロディをもつてきて、私に編曲を頼んだ。ブラスト・ジャンダムも「あまりある悲惨(ベーン・ウートウート)」という歌を書いてくれた。これで私たちはテープに吹き込むのに十分な曲を持つることになった。テープの吹き込みにあたってポインター・グラドンチャムナンが私たちの楽団に復帰した。このテープはルムピニ公園で開かれた生きたための歌の祭典までにでき上つたので、そこで売ることができた。このフェスティバルで私たちはイサーン映画の弁士サクンラット——またはスラシー・パータムという

名の方が知られているかもしれないが——に会った。彼が私たちをウボンにさそったのである。図書館を建てるためのチャリテイコンサートを開くことだった。このウボン行きは米軍基地が引揚げた後だったので、友だちの元バンドマンたちは転業を余儀なくされていた。飯売りをやっている者、家へ帰って農業をやっている者、田舎芝居の伴奏をやっている者、サムローの運転手になった者、コーヒーショップでフオークをうたっている者などだった。

オームノイの女工サムラン・カムグランが死んだ後、バーンボン郡の製紙工場の労働者たちがガンマチョン楽団と私たちを呼んで、西洋人の教会で演奏会を開いたことがある。この催しはストライキや抗議集会と関係なく、ただの演奏会で、その教会の牧師の許可を得ていた。始めにガンマチョンがうたうことになり、彼らはマヒドン大学の学生であることを自己紹介してから「人と水牛」を演奏し始めた。ただそれだけのことだったのだが、牧師はつかつかと入って来ると、「すぐにやめなさい。ここは神聖な場所です。煽動するところではない」と言い放ったのである。ガンマチョンはそれを無視してうたい続け、聴衆

も彼らに声援を送った。牧師は牧師でそれを無視してただちに電気を切ってしまったので、聴きに集まっていた人々からは不満の声が上った。私たちは牧師としばらく口論してやめてしまった。会の世話人たちはその場所から三、四キロ離れた工場の裏の線路ぞいの空地に私たちを案内し、そこで屋外演奏することになったのであるが、聴衆もそこまでぞろぞろついて来たのだった。

それから私たちはある商科短大のストリング・コンボの楽団とともに一度南タイへ行った。この時はプケット県とナコンシータマラート県まで行った。一九七五年七月四日私たちのうち三人は、アユタヤで開かれるアメリカ合衆国建国祭の抗議集会に参加した。モンコン・ウトックだけはコーラートへ行って参加できなかった。暗殺されたラーチャシマ高校の生徒マーナ・インタスリヤの葬儀に参列していたからである。アユタヤでの集会場はあまり人通りのない寺院の前の広場で、背後は川になっていた。人の集まりが悪かったので何曲もうたつたわけではなかったが、「ジット・プミサク」の「この遺骸がジット・プミサクなのか」のところまで来た時、舞台の前で銃弾が一発

はじける音がした。聴衆は多少動き出したけれど私たちはまだうたい続けていた。その時である、今度は川の向う岸から会場へめがけて砲弾の音が轟いたのである。まるで戦争が始まったようだった。私たちも舞台の下に飛び下りて身をかくし、聴衆は暗闇の中を散々に逃げ帰ってしまった。残ったのは私たちと集会の準備にあたっていた学生たちだけだったのである。

タマサート大学で学生たちが九人の農民の逮捕に対する抗議集会を開いていたところ、私たちはそれぞれ別々の所にいた。私はチェンマイへ、他の者はコーラートへ向っており、スラチャイ一人がバンコクにいた。この集会のために彼は「一〇人の死が一〇万人を生む（タイ・シップ・グールド・セーン）」を書き、メロディはポップ・デイランの「It's A Hard Rain Gonna Fall」を編曲して使った。このあと私たちはコーラートに集まって新しい曲の練習をした。スラチャイは一人でイサーンの村を回って来て話してくれたところによると、彼はある村で空地の真中に立つてうたっていたところ、やしの実が一個大きな音をたてて落ちてくると同時に、誰かが大声で「コミュニティが来たぞ」とどなった。これだ

けだったのだが、集まっていた人々は散々に逃げ帰ってしまったということだった。

コーラートで私たちは二カ月間新しい曲の練習をしてから再びバンコクに戻り、デモクラシー記念塔で行われた一〇・一四記念集会でうたつた。この時トングラーン病に倒れており、ボンテープが参加していた「危険なアメリカ人（アメリカン・アンタラーイ）」という新しい歌は、この集会で初めてうたつたのである。このあとまたコーラートへ帰って練習するとともに、カラワンをプロの楽団とすべきかどうかについて討論し合った。展示会や抗議集会が開かれるのを待って演奏するのはなく、である。地方巡業をして回る田舎楽団はなかなかうまくやっているのだからあれを真似してみようか、という意見も出たが、私たちの場合アンブもマイクも持っていないので設備の点で問題があった。どうしたらいいのか……いっしょに考えてくれ！

まずウボンで映画館を借りて（上映時間外に）収入につながる演奏会を開くことにする。なんとか会場費と交通費をまかなえたが宣伝に回るための用意が何もなく。コーラートでの演奏会は準備期間がかなりあつたし友人も多く、予想以上の成果が上って、その結

果イサーン巡業の予定をたてることができた。まずローンを借りて小さな楽団用のPA一式を購入し、コーラートのムアンコン郡でそれを初めて使ったのである。ここで私たちは大変暖かな歓迎を受けたのだった。

こうしてイサーン巡業の旅は簡素な準備で、しかし心暖たまる旅として始まった。七五年の終りころには私たち五人の他に、映画「田舎の先生」の演出をしたスラシー・パートムが司会者として加わり、その他にも五人がそれぞれ役割を担担して参加していた。広報には弁士「ボンサヤム」が、資金面は「ネン」が、運転手やメカニックにはトゥー、営業には「ローデン・ガツプ・セキ」が、それぞれ当った。カラワンはこの資本からも独立していた。すなわち私たちを援助する放送局は全然なかったのだから。私たちがしたことといえばテープを映画館に委託販売してもらったり、演奏の何日か前にポスターをはっただけで、当日はボクシングの呼び込みのようになり車で呼びこみに回つたりしたものだ。そのころ私たちは、カラワンが来ると何か過激な事態をまき起こすという風評をたてられていたので、「危険な楽団、カラワンがやってまいりました」と宣伝して回つたのだった。

映画館のオーナーからよくきかれたものだった五人でどんな音楽をやるのだ、ダンスをやる若い女の子は全然出ないのか、と。私たちは、その代わりにスライドを見せるのだと答えたものだ。私たちの身なりや様子を見て、会場費を受けとらないばかりか、飯を炊いて食べさせてくれた映画館もあったし、大きいところでは切符切りの日当とエアコン使用料だけしか徴収しない映画館もあった。大きな映画館、小さな映画館、いろいろな所で公演して回り、果ては廃業した映画館まで使ったこともあった。自分で掃除して椅子まで並べて、である。なぜならもう長いこと使っていないからである。そんなある映画館では舞台がまるで船のようで、私たちが立って演奏を始めると右や左に揺れるのだった。まる一カ月というもの私たちはほとんど車の中で過ごした。たまにあいた日には田舎の友達に会いに寄つたり、村の中で無料の演奏をしたりして、それが気分転換にもなった。チャイアブーム県ゲンクロー郡ではトラックの上や、モータムの舞台の上や、舞台なしで土の上で公演して回った。この時のイサーン巡業は資金作りの面では成功どころか、車の借り賃すら足りないくらいだったが、カラワン

の歌を広めた点では効果があつた。ほとんどの映画館では私たちの公演をテープにとらせてほしいと申し出た。ラジオが私たちの歌を流してくれないので、地方の映画館で流してくれるだけでもいいと思って喜んでそれを承諾した。

これに続く私たちの公演予定は工場を回ることだった。工場というところは労働者のストがない限り、簡単に入りこんで演奏する場ではないのだが、一〇・一四以降賃上げや福利厚生改善をめぐって絶えずストが起きていた。七五年の末から七六年初めにかけて私たちは今までになく忙しくなつた。まず芸術大学の新しい講堂での公演があつた。ラームカムヘン大学、チュラロンコン大学に続いて初めてだった。この時は私たちは道具だてがそろつていたのでどこへでも行つて演奏できた。どこかの工場でストがあれば、ブラブラデンであろうとノントブリであろうと応援に行つた。七六年初頭には政治状況はほとんど尖鋭化してきていた。二月の初め「ガンマチヨン」楽団のブリダー・ジンダーノンが、血も凍るようなやり方で暗殺された。ほとんど同じころ「ケーン・イサーン」楽団のメンバーがピッツアヌロークの教員養成大学で演奏

着がえをするにも立つていられなくて、セメントの床に膝をつけなければならぬのだつた。ベッドは二段か三段になっていてあまりにも窮屈だった。トイレは五〇〇人に対して九個しかなく、しかもともに使えるのはたった一つでしかなかった。モンコン・ウトックはこの有様に心を動かされて「新しい雨(フオン・マイ)」という歌を作つた。メロディは民謡からとつた。この歌はタマサート大学でソングラインの日になつたのである。

3 チャンネルの依頼で、「ザ・インボッシブル」という楽団とともにテレビに出たのもこのころのことである。カラワンのテレビ出演はこれで五回目だった。この番組では「人と水牛」と「ジット・プミサク」をうたつたのだが、その結果この番組は中止されることになつた。「人と水牛」という歌そのものもブンテン・トンサワットにより以後うたうことを禁じられてしまつた。「人と水牛」は歌唱禁止令を受けたのである。新聞がこのニュースを一面でとりあげると、テープとレコードの「人と水牛」アルバムは洪水のような勢いで出回つた。「生きるための歌」の各楽団はこぞって独裁政権のこの措置に強い反対の声をあげた。王宮前広場で反対集会が持たれ

中射たれ、また「ゴームチャイ」楽団員はサコンナコン県ソングダウ郡でリンチにあつてゐる。続いてオムレート・チャイサアトがナコンラーチャシマ県で暗殺され、私たちもその葬儀に参列した。二月末にはブンスン・ブンヨータン博士が暗殺され、この時ワイサー・カントップは「水は天をおおい、魚星を喰う(ナームトゥアム・フェー・フラー・ギンダーウ)」という歌を作つた。この歌は私たちがテープに吹き込んだ最後の歌となつた。七六年三月二〇日は政府が学生に、外国の軍事基地をそれまでに撤去させると約束した日で、これに先立ってほとんどの大学ではこの問題に関する運動がくり広げられていた。ポントップはこのころ、ドラマー以外にも司会者の役もつとめるようになっていた。そしてついに三月二〇日がやつてきた。集会は戦勝記念塔の周辺で開かれ、朝から夜中まで続いた。ちょうどマヒドン大学の楽団「フアーマイ」が演奏していた時だった。舞台のすぐそばに爆弾が投げ込まれて炸裂し、職業技術専修学校の学生で、風刺劇の役者でもあつた「チャイレック」が負傷したのである。そしてこれは翌日の大デモ行進へと発展した。私たちはこの時急ぎよ編成された楽隊の中にい

さまざまな職業の市民が参加して抗議声明に加わつたのである。各楽団が「人と水牛」をうたつた。この歌の作詞者ソムキット・シンソンをはじめ、たくさんの芸術家が立つて反対意見を述べた。そして結局この禁止令は何の効も奏さないことになつてしまつたのである。

さて私たちは、どんな夜中であろうと公演とあらば行かねばならなかつた。その日は二つの公演があることになつてゐた。夕方は水道局の労働組合の祝会であつた。夜は芸術大学の学生の催しに出るはずだった。ところが夕方の公演が終つてから次の公演の主権者とすれ違つてしまひ、ついに会はずじまいだったので私たちは家へ帰つて寝てしまつた。夜の十二時ごろになつて彼らはようやく私たちを見つけ、結局ナコンパトムまで出向くことになつたので、着いたのが二時過ぎ、公演が終つたのが四時を回つてゐたのに、聴きに来まつていた側もよくぞ待ち続けたものである。

六月の半ばに私たちは休みをとつた。モンコン、トングラン、ポントップは田舎に行つた。友人のところの家畜小屋に泊まりながら、彼らは農民と語りあはせよう一つの新

た。ある者たちは乗合トラックの上に乗つて「危険なアメリカ人」を声をはりあげてうたい続けた。ちょうどサイアム・スクエアのところにはさしかかつた時、デモ隊の中で爆弾が炸裂し、一〇数人の死傷者を出した。「ルークトゥン・サッチャタム」楽団の司会者「ムー」も負傷した一人だった。このデモの後、ポントップは「ゴラートはアメリカを追い出す(ゴラート・カップサイ・アメリカ)」という彼の最初の歌を作つた。節は民謡調だった。この後私たちは「ガンマチヨン」とともに再び南タイへ向ひ、ヤラーとパッタニーではどちらもボクシング場を借りて公演した。全村回教徒の村で演奏したこともあつた。彼らはタイ語を解さず、私たちは彼らのヤワイ語を解さなかつたので、通訳を介しての演奏会だった。気が通じない、終いには彼らのうまい郷土料理に舌鼓をうたつたのだつた。

南タイから戻つてからも以前と同様大学を回つての演奏活動は続いてゐた。たとえばバセンの教員養成大学にも行つた。が、タマサートが減つて、チュラでやるのが多くなつた。私たちはバインプーにある織物工場に行く機会を得た。ほとんどが女工で、彼らは私たちが寮に案内してくれた。天井が低くて

しい曲「魔物がぐくに支配する(マイン・クローン・ムアン)」を作つたのである。イサーンの楽器ケーンも使うようになったのはこの時からである。

七六年七月末から八月半ばにかけて私たちは学生たちのグループとともに南タイへ行つた。ナコンシータマラートの映画館でやつた時は、フォークの楽団を装つてカラワンの名を明かさないうたい、最後の曲が終つて挨拶する時初めて自分たちがカラワンであることを公表した。そこからトラン県へ行つてやはり映画館で公演した後、ある村に向かつた。そこでは村中の人々が弁当を作つてきて食べさせてくれて、一人が一本、二本と酒を持ってやつて来るのだった。帰る日になると私たちの通るのを待つて次々に果物やタバコを差し出すのだった。そして汽車がまたここを通つた時には、彼らの息子、娘たちに届けてほしいと、果物を託すのだった。忘れられない感動的なシーンだった。ハトヤイに着いた時にブラパートがバンコク入りしたニュースが入り、学生たちがソングラー県で抗議集会を開くから応援してほしいと依頼してきたので当然承諾した。これがすんでから汽車に乗つて帰路についた。トンブリに着くと私たちは

楽器をかついでただちにタマサートに入った。その日はひじょうに緊張した空気がはりつめていた。ラームカムヘン大学の学生が爆死し、もう一人が負傷していた。銃撃が次第に激しくなりついに集会は解散し、警官隊が学内に立入り、捜査を始めた。

この年の一〇月も間近になるころ、何かが見えないところで進行していた。私たちはといえどこのころイサーンへまた出かけて行った。この時は「トングラー」楽団、マヒドン大学演劇部、ラームカムヘン大学の「プレウティアン」劇団とともにロイエト県へ行つたのである。一行が着く前に、「コミユニストがやってきて煽動しようとしているから気をつけろ」というデマが県中に流されていたのだが、夕方ブンバラーンチャイの町に着くと人々はぎつしり集まって歓迎してくれていた（私たちは以前この映画館で公演したことがある）その日は地方の音楽とストリング・コンボのバンドの公演もあり、マヒドン大学演劇部の踊りで開幕した。「トングラー」の演奏がそれに続き聴衆の感動と関心を集めた。「プレウティアン」劇団の芝居が終ると私たちの番だった。その日の司会者は聴衆の涙と笑いをさそう名司会ぶりだった。我々がコミ

ユニストであると吹き込まれてきた一人の警官は、「これがコミユニストというものか」と目に涙を浮かべて周囲の人々に語ったということである。

私たちはいったんバンコクに戻って何日もたないうちにまたチャイヤブーム県に公演に行くことになった。今度は県庁所在地の映画館でマヒドン大学の演劇部といっしょに公演した。ここは人の集まりがあまり多くなく何事もなく公演を終えて、その後田舎の映画館でも公演した。その人たちはマヒドン大学演劇部の芝居に拍手喝采した。その近くの村の人たちが私たちが来ているという噂を聞いて連絡してきた。けれども彼らは荷物を運ぶ車を用意できず、馬車が来たので荷物を乗せただけでいっばいになってしまい私たちは歩いて行くことになった。村に着いた時はもう暗くなっていた。彼らの用意した会場はお寺で、発電機が度々止まったのだが、誰も帰る者もなく終りまで聴いてくれたのだった。バンコクに戻って間もなく「タノム帰国」の報が入った。チュラロンコン大学で抗議集会が開かれ、これがバンコクでの私たちの最後の公園となったのである。

一〇月初め私たちはイサーンの学生から要

請を受けてコーラートへ向かった。ちやうどタノム帰国反対集会の三日目だった。この集会はすぐ解散したので私たちはその夜ウボンに向かい翌朝教員養成短大での集會に参加したのである。ここでは試験期にあたっていたので集會は長く続かず、一〇月五日夜私たちはヒッチハイクでコンケン入りした。コンケン大学に着いたのは夜中の二時頃だったのですがそのまま寝てしまったところ、早朝五時か六時頃同室の学生たちが「起きて下さい。流血の事態が起きてしまいました」と泣きながら起こしてきたのである。したがって一〇月六日は早朝から抗議集會が大学で開かれた。次々とニュースが学生たちに報告され、私たちは音楽を受け持った。ラームカムヘン大学の楽団「コームチャイ」も来ていたので、音楽とデイスカッションが交互に夕方まで白熱化して続けられた。そしてついに統治改革団の声明がラジオで流されたのである。この声明は大学中に鳴り響いた。学生リーダーが立って、「独裁制が復活したのだ。しかし我々は再びやつらに頭を下げはしない……」と宣言した。教授も学生も皆がお互いを励まし合ったのである。

私たちはこの時もう選んでいることはでき

なかつた。一九七六年一〇月六日夜、月が道を照らしていた。私たちは乗合トラックに乗って出発した。どこへでもよかつた……軍事独裁政権の手からのがれられるところならば。

(次号に続く)



訳注

- (1) スラチャイ・ジャンティマトン 東北スリン県の出身、芸術学を専攻しカラワン楽団の元リーダー、詩人で小説家。解放区を出て現在タイ北部の少数民族の部落にいと伝えられる。昨年一〇月、少数民族を舞台にした小説「夜明け前」がバンコクで出版されている。
- (2) ウィサー・カンタップ 一〇・一四学生革命の引き金となった憲法要求闘争で逮捕された二三人の一人。詩人、小説家。一〇・六以降プーバン山系の解放区に入るが一九八〇年共産党と訣別、バンコクに戻る。現在広告会社に勤めるかたわら小説を執筆中。解放区にいる間にも二篇の短篇小説を出している。
- (3) ソムキット・シンソン 詩人。「人と水牛」の作者。詩人プラサート・ジャンダムとともに東北タイのコンケン県サップペン村に村落共同体を作り農民の啓蒙を試みる。一〇・六以降解放区入り。
- (4) 「プーブ・カーウ」 ジット・ブミサクの「新聞の良心」という詩の中の一節。
- (5) 乗合トラック(ロット・ソントオ) 小型トラックの荷台に座席をつけたミニバ

ス。

- (6) モムルアン 王族から三代目の華族の称号。
- (7) ピン ギターに似た東北タイの楽器。
- (8) クルイ 中部タイの笛(木管)。
- (9) カムシン・シーノーク 短篇小説作家で別名をラオ・カムホームともいう。
- (10) ケーン 笙に似た東北タイの楽器
- (11) 斧の刃のある所から柄の所へ タイ国の形は斧または柄杓にみたられることが多い。

著者略歴(「読書世界」編集部による)

バンコクで生まれ、イサーンで育つ。子供の頃ウドン・コーラートでG・Iと親しむ。一九七一年バンコクへ戻りラームカムヘン大学に学ぶが中退。学生時代は同大学の「新世代クラブ」と近い関係にあり、一〇・一四前後は詩や評論を新聞に発表、スラチャイ・ジャンティマトンをリーダーに、モンコン・ウトック、トングラー・タナー、ポンテーフ・グラドンチャムナーンとともにカラワンを結成。一〇・六以降森に入るが一九八〇年の初め森を出て、現在はフリーライター。

土呂久びとの笑いについて

対馬幸枝

一九八一年十一月十四日、土呂久鉍害が地元小学校の教師たちによって告発されてから十周年のその日、宮崎市で記念集會が開かれた。川原一之氏（岩波新書『口伝亜砒焼き谷』の著者）の講演と落合正氏（土呂久・松尾等鉍害の被害者を守る会会長）の挨拶のあと、

地元のフォーク歌手霧島太郎さんがギターを抱えて壇上へ。舞台の上手奥にはその日土呂久からやってきた七人の被害者たちが椅子に坐っている。

霧島さんが、今はじき佐藤アヤさんの詠んだ和歌に曲をつけたものを歌い始める。

今年こそ今年こそはと念じつつ

なす術もなし寝たきり雀は

何十年も鉍毒の混じった水を飲料水としたヤさんは、「私の身体には青春もなく、結婚

もなく、ひたすら病いに明け暮れ一生を台なしにされた」と嘆きつつ、前年の十一月その悲惨な生涯を閉じていた。

やるせなやこころびまろびつ生くる身に

なぞ降りかかる無情の雨は

土呂久事件の矮小化を謀る宮崎県と環境庁は、土呂久鉍毒病の公害認定にあたって慢性

鉍素中毒症に限定、しかも認定要件を、当初

皮膚（色素異常と角化）と鼻中隔穿孔に絞つ

た。そのためアヤさんはじめ多くの重症患者

は認定からはずされた。この歌の「無情の雨、

はそうした行政のしうちをさすのさうらう。

五十路来ていばらの道のさい果てに

つかみしものは宿命の光

壇上の被害者たちの多くは下を向き、嗚咽をこらえていたようだった。アヤさんの苦し

みはそのままで彼らのものでもあったはずである。ミキさんも鉍毒による病気のために結婚を諦めた。行かず後家。だった。そのミキさんは、眼鏡をはずし、ハンカチを目におし当てている。ハツネさんやトネさんの肩もこさぎみにふるえている。

只ひとつ歌にも詠めぬ胸うちを

知る人ぞ知れ問われたくなし

テープに残っているアヤさんの声はやさしく、その語り口はおだやかだ。それだけに、

この歌に込められた怒りと怨念の深さは聞く者の心を重く塞ぐ。集會の参加者の中からも

すすり泣きが聞こえてくる。

霧島さんは次に佐藤鶴江さんの詩を歌い始めたが、会場をおおった悲しい空気は歌うのを困難にしていた。一小節歌うと、「ちよっ

とすいません」と謝って、彼は、ひとしきり涙にくれた。やがて気を取りなおし、それでも顔を上に向けたまま、彼は絶叫するように歌いあげる。それは鶴江さんの詩「怨念のふるさと」の一節だった。

皮膚に砒素斑点のあった鶴江さんは第一次認定患者七名のひとり。事件の早期収束を図る企業と行政は、一九七二年十二月被害者たちを軟禁状態にして補償交渉をまとめ、鶴江さんは三〇〇万円を受け取る。しかし失明同然で肺や腸を患い、病院通いに明け暮れる生活にこの額では償われぬとして、一九七五年十二月他の被害者数人と加害企業住友金属鉍山を相手に提訴。だが全身を蝕んだ鉍毒はそれから二年も足たぬうちに彼女をも死へ追いやる。

集會は、さまざま挨拶などにつづいて、第一回口頭弁論の時の鶴江さんの陳述書が朗読され、会場はふたたび涙にうずまった。休憩の後には創作劇「亜砒焼き谷の悲劇」の上演。川原氏の「口伝亜砒焼き谷」の挿話のいくつかを古老と老婆が語る形で演じられるのだが、客席のいちばん前の席に戻った被害者たちに目をやると、彼らはもうニコニコと笑っている。それは、霧島さんの歌や鶴江さんの陳述

にやはり涙をおさえることができず、演劇が始まってからもはじめじめした重い気分をひきずっていた私には、奇妙な衝撃だった。まして眼の前では自分たちが経験した地獄絵巻さながらのできごとが演じられているのだ。トネさんは、隣のハツネさんと、古老役の、深みのない、色だけのシワを笑い、鼻水を拭く仕事をくり返す老婆役の演技に感心する。そして、彼女が演じながら編んでいるワラ草履は芝居が終わる頃にはこんな（30センチ程に）長くなっているだろうと、亜砒にやられた喉の奥からかすれた笑い声をたてている。

この集會の二カ月前に私は初めて土呂久を訪れ、被害者の何人かに会った。それまで悲惨な話ばかりを聞いていたので気の重い旅立ちだったが、彼らは愉快な語りでもてなしてくれた。たとえば、大正末期の鉍山で亜砒を焼いた実雄さんは、「亜砒を焼く時は男でも白粉をつけたものですよ。じゃけれども結局は亜砒負けして皮膚のやわらかいところからやられていく。コゴがやられた時はガニ股の歩みですよ」と笑いを買っていた。ミキさんは、男衆が病に倒れていく中で被害者の闘いをひっぱってきた女三羽ガラスのひとりだが、裁判の口頭弁論のあった夜自らをヨロケガラ

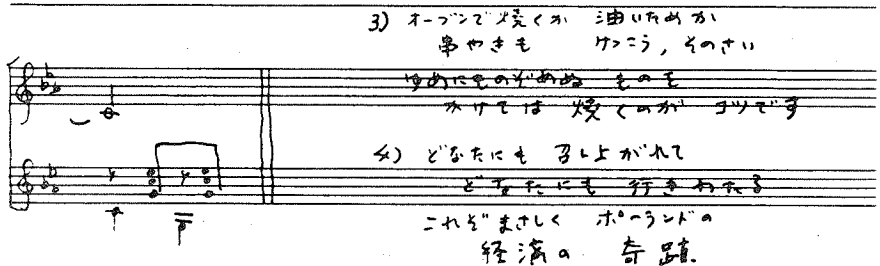
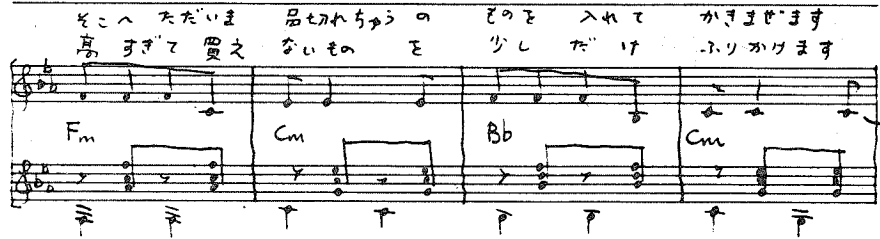
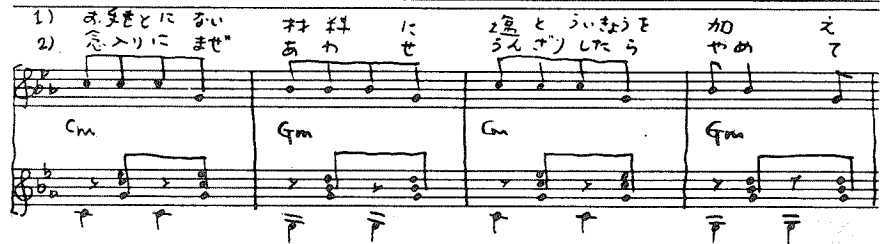
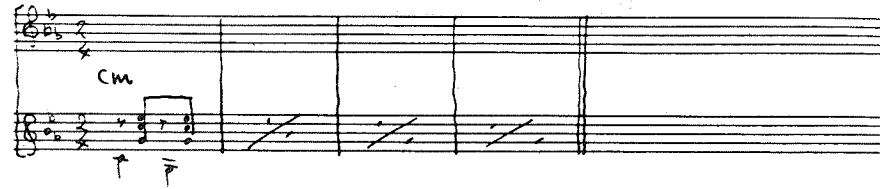
スと紹介したあとで、「被害任民を見捨てた県の仕打ちには憤りを覚えました。もうヨロケておるような時代ではない。今度は翔んでるカラスになって世界一周しようと思えます。」と挨拶をして、みんなを喜ばせた。

鉍山に炭を運ぶ仕事をして亜砒の粉と煙をもろにかぶった高雄さんは、神経痛を病み、ここ三年余りは病院で寝たきりだ。その日、高雄さんの左手首には、赤い、こぶし大のアザがあった。付添いのため毎日病院に通っている奥さんが、「そのアザを」医者に見せよつたら、あんたがきつく引っぱるからじゃやわれしました」と、嬉しそうに笑っていた。

クミさんは、結婚して間もなく夫の政市さんと共に鉍山に入る。素足で硫砒鉄鉍の粉をこね、それを素手でだんご状にまるめた。政市さんと一緒に亜砒を焼きました。政市さんは一九四八年に五十二歳で、それまでの二〇余年を寝たきりのままで、この世を去った。ひとり息子の秀男さんも鉍毒にやられ、一九七八年十月裁判闘争のなかばで他界してしまつた。それでいて、八十歳をこえたクミさんの顔は柔相だ。そして、「勝利の判決を聞くまでは死ぬるわけにはいかん」と、目を細めて笑った。

（一九八二年一月二〇日）

ポーランド式料理のつくりかた



講演・川原一之

+

長編記録映画

咽び唄のごと

土呂久

製作 映像集団エラン・ヴィタル

〈市民集会〉

土呂久鉈害裁判勝利にむけて！

宮崎県高千穂町の山間のムラ、土呂久。大正9年から約半世紀にわたって亜硫酸が製造され、大気・水・土壌すべての環境を破壊した。亜硫酸は致死量0.1グラム（耳かき一杯分の粉）の猛毒。草木は枯れ、農作物は壊滅。牛馬はのたれ死に、人びとの身体はむしばまれた。

一九七一年十一月この鉈害問題が地元の小学校教師によって告発され、被害住民の人權回復の闘いが始まった。現在8名の公害認定を勝ちとっているが（そのうちすでに24名が死亡）、それは土呂久の人口のほぼ半数に及ぶ。一九七五年十二月、完全な被害者救済を訴えて住友金属鉈山を相手に裁判へ。それはまた、休廃止鉈山の最終鉈業者の賠償責任を問い、かつ被害者不在の行政を裁く闘いでもある。新しい産業公害が私たちの健康と生活環境を破壊しつづけている今日、土呂久の人たちの闘いはまた私たちのものでもある。

土呂久訴訟の早期結審と勝利判決のために集え！ 入場無料

とき 2月20日（土） 6時20分

ところ 千駄ヶ谷区民会館（国電原宿駅10分 電話〇二七八五四）

主催 土呂久鉈害問題を考える会（電話八三〇六四六、七〇七一―四七六）

ヤネク・ヴィシニエフスキは死んだ

1. おかまのよ 仲間を 警察は 今日 武器をつかいた
 4. 殺された 12 羽の あひつまで 血にそめて 労働者

5は # 音を なげた ヤネク ヴィシニエフスキは 死んだ
 75を 機力が うつ

2. 夢根に のせ 赤い
 3. 炸裂と 3秒と 僅か
 5. 空を 走る 足音
 6. 泣いた 母よ 泣かば

はこんだ ホリ公と 戦車の ならば 前を ながま たらよ あだを うて
 がスガ くりか せし うちこまれた 毎より 子どもの 女 が だおれ
 たち 家にかえるう たたかいは おわた 世界は 見て 見ぬふりこ
 しない 工場の わきには 血染めの 旗 バンと 自由と 世直しのためは

ヤネク ヴィシニエフスキは 死んだ D.C.

娘にあたえる歌

かあ さんはいそがしくて かま へにもあえない おお さんさく なつと

さにはな してあげようね 5は"うに みら た はな しろのあつ日
 こころを ひらつに たたかいてるひと

は ねむるひもない よる はげしく 2. なつたつね ながさかから
 ち 今日とあしたのためには まだ おま 玉のためには (humming)

すに かえりてまててね 今 ほんのしあわせをした このうさで

ポーランドの「禁じられた歌」3曲。「ポーランド式料理の作り方」はグダンスク造船所で配布されたストライキ情報紙「ソリダルノスチ」第4号、1980年8月25日に、「娘にあたえる歌」は第7号、8月27日にのせられた詩に曲をつけ、「連帯」のカセット新聞で工場の有線放送から流された。「ヤネク・ヴィシニエフスキは死んだ」は1970年12月のグダンスク以後ひそかにうたいつがれた歌。おなじカセット新聞に録音されているが、ここにだしたメロディーは、アンジェイ・ワイダの映画「鉄の男」のサウンド・トラックから採譜した。

編集後記

今年には雑誌の枠のなかでできるだけまとめた本をつくらう、という提案が編集会議でだされた。先月号は黄哲暎「土地ころがし」を紹介したが、今月号はタイの歌を中心にまとめてみた。前に紹介済のものは、この機会に手なおしたものもある。人びとの歌に正調はない。歌はいつも変化している。定型ができるのは、その歌が死んだときだ。

「生きるための歌」カラワン楽団の記録は三回連載の予定。一回目は楽団のはじまりから一九七六年のクーデターまで。水牛楽団はみずばらしく、へたで、舞台上でればみんながわらってしまうとおもっていたら、それ以上がいたのはびつくり。カラワンは楽器さえもたずにはじめたのだ。政治集会の余興から自立した活動へむかう過程もよくわかる。タイではそれが政治運動の発展とかなっていった。日本ではそんなことはなかったし、今後もないだろう。口先で文化の必要をいっても本心はわかっている。

ポーランド問題でも、いくつも集会がひらかれた。支援組織がいくつもつくられた。自分の組織のつごうにあわせて問題を見る。みんながバスの運転手になりたがる。ポーランドの官製組合とちがわれない体質をそのままに「連帯」支援をしている。こういう運動でも必要なきときには協力はできるが、信用できない。

組織をつぶされ、地下に追いやられても生きのびるのは、ポーランド文化があるからだ。そして、そういう人たちが文化をたえずつくりだしている。組織とできあいの思想でやっているのは天気の良い日だけだ。敗北した運動の指導者が自民党にはいる。理想をまもる人間は死ぬ。死か変節か。これでは文化のうまれようがない。それどころか、生きていく人間はいつ裏切るかわからないから信用できないのだ。人びとの生きる場所、希望のもてる方向はできあいの運動のなかにはない。

購読の御案内

*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信 第四巻第二号

一九八二年二月十日

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-13

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ